

令和元年6月13日現在

機関番号：17102

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016～2018

課題番号：16K13530

研究課題名(和文) 教師の自己改革に関する理論的実践的研究 - 「自己否定」的省察の国際比較 -

研究課題名(英文) Theoretical and practical research on teacher's self-reform : International comparison of 'self denial' reflections

研究代表者

田上 哲 (tanoue, satoru)

九州大学・人間環境学研究院・教授

研究者番号：50236717

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、教師を完成されたものとはとらえず、常に未完成なものであり、自己をより良く変革していくものとしてとらえ、その変革を促す方法として「自己否定」的省察が重要であることを示したものである。具体的には、それぞれの教師にとって自己の「苦手な子ども」が、自己を否定的に自覚し、自覚的に分析する「自己否定」的省察につながるキーになる子どもであること日韓中3カ国の教師への調査を通して明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、「自己否定」的省察が教師の自己改革を促すものとして理論的にも実践的に重要なものであることを示した。

このことは教師教育における教師の教育者としての成長について示唆を与えるものであると同時に、人間の教育そのものにおいて、自己を否定的に自覚し、自覚的に分析する「自己否定」的省察が重要であることを明らかにし、機械的な教育、合目的な教育ではなく、人間形成/自己形成としての教育の端緒を示したものである。

研究成果の概要(英文)：This research does not regard teachers as complete, but is always incomplete, and regards the self as something that will transform itself better, and it is important to consider "self denial" reflection as a way to promote that transformation. It indicates that there is something.

Specifically, it was clarified that "a weak child" of oneself for each teacher is a key child who leads to a "self-denial" reflection that negatively recognizes oneself and analyzes it consciously.

研究分野：教育方法学

キーワード：自己否定 教師の自己改革 省察 自覚 人間形成 自己形成

1. 研究開始当初の背景

多国籍社会、多文化社会の進展によって、学習者の多様性に対応しそれを生かすことが教師に求められている（OECD 教育研究革新センター- 2010）。しかし、多国籍社会、多文化社会の進展にかかわらず、本来もともと一人ひとりの子どもは個性ある独立した人間であり多様である。その一人ひとりの子どもの多様性を尊重し対応しそれを生かすためには、教師には自身を固定化することなく、学び成長していくこと、柔軟に自己を改革していくことが求められる。また、今後の教育において強く推奨されているアクティブ・ラーニング（AL）では、教師が学習者とともに切磋琢磨してともに成長していくことが求められている。ここでも教師の自己改革は重要な課題である。しかし、教師の自己改革は容易なことではない。それを妨げるものは教育を「善」と考えその指導を「義」とすることにもとづく教師の自己肯定と比較による評価にもとづく教師の自己否定の維持である（田上 2015）。筆者はこれまで授業研究における抽出児についてそれが省察機能をもつことを示し、選定する教師の子ども観や教育観に抵触することによって選定される抽出児（とくに教師にとって「都合の悪い」思考や表現をする子ども）に基づくその省察が、教師の自己更新を阻害する教師の自己肯定と自己否定を「自己否定」するものであることを理論的に考察した。

2. 研究目的

教育の質は、教師のあり方によって大きく左右される。教師が教育者としてどのように成長、発展するか。常に学び成長し続けている個性ある多様な子どもたちにかかわる教師には、本来自身も固定化することなく、常に学び成長、発展していくこと、すなわち自己改革が求められる。それは教師が自己をそれでよしとしないことによって、いわば常に自己を否定的に省察していくことによって可能となる。

本研究は、教師の自己改革を促す「自己否定」的省察について、理論的に検討するとともに、国内外の教師の「都合の悪い」思考や表現をする子どもならびにそのような子どもを媒介にした「自己否定」的省察の実際を比較分析することによって、「自己否定」的省察の理論的実践的基礎付けを行うことを目的とする。

3. 研究の方法

（1）文献による理論研究

1 教職の特性に基づく教師の自己肯定と自己否定の問題、2 教師の自己改革の問題、3 教師における省察と自覚の問題について、文献に基づく研究を行う。特に上田薫氏（元都留文化大学学長、戦後文部省に入省し、社会科の学習指導要領の作成に携わった）とその祖父で哲学者である西田幾多郎の所論を検討する。本研究の「自己否定」的省察の発想は、上田氏の「動的相対主義」理論の検証の過程で生まれたものである。

（2）国内外の教師への調査研究

国内外の教師に対して、「都合の悪い」思考と表現をする子どもとそれに基づく「自己否定」的省察に関する聞き取り調査を行う。

4. 研究成果

(1) 平成 28 年度は、教師の自己改革と「自己否定」的省察の本質を追究する基礎作業として、上田薫氏の「動的相対主義」の理論を詳細に検討するとともに、上田氏の祖父である哲学者西田幾多郎の「絶対矛盾的自己同一」をはじめとした思想を辿ることによって、上田氏の理論が西田の思想を引き継ぐものであることを明らかにすることになった。

そのような基礎作業を踏まえて、経験科学、規範学から人間形成の学としての教育学の方向性を示し、その教育学を基礎づけるものとして授業分析を「事例研究」として捉え直し、さらに多様性(diversity)の問題を再検討した上で都合の悪い思考と表現をする子どもに焦点を当て教師の自己改革を促す「自己否定」的省察を促す授業研究(Intercultural Lesson Study)の基礎づけを行った。

(2) 前(平成 28)年度に検討した理論的な仮説である、都合の悪い思考と表現をする子どもに焦点を当てて検討することが教師の自己改革を促す「自己否定」的省察につながるということに関して、平成 29 年度は、日本国内、大韓民国ソウル市、中華人民共和国上海市において、教師にとって「都合の悪い子ども」「苦手な子ども」に関する聞き取り調査を行った。

日本においては、年間を通して、糸島市の小学校中学校の教員、民間教育研究団体に所属している小学校中学校の教員、様々な研究集会や訪問先の学校における聞き取りを行った。5 月に大韓民国ソウル市での調査、7 月に中華人民共和国上海市において調査を行った。

(3) 平成 29 年度の調査(日本国内、大韓民国ソウル市、中華人民共和国上海市における教師にとって「都合の悪い子ども」「苦手な子ども」に関する聞き取り調査および日本における民間教育研究団体に所属している小学校中学校の教員に対する同様の聞き取り調査)を踏まえて、教師の自己改革とそれを促す「自己否定」的省察についての理論的な整理とまとめを行なった。

具体的には、子どもの事例に加えて、広く教育実践の例外的事例をもとに教師が「自己否定」的省察することが教師の自己改革を促すことになることを論証した。

また、所論において、本研究のいう「自己否定」的省察の理論的端緒となった上田薫の「動的相対主義」の思想、ならびに本研究を展開するなかでその関係が徐々に明らかになった、上田に深く影響を与えたものとして西田幾多郎の哲学を踏まえて、教師の自己改革に「自己否定」的省察が必要であることともに、より普遍的に人間形成/自己形成としての教育に「自己否定」が必要であることを論じた。

引用文献

- 田上哲 (2009) 「授業研究における抽出児に関する基礎的考察：対象児との比較を中心に」九州大学大学院研究紀要(教育学部門)、11 巻、pp.111-123
- OECD 教育研究革新センター (2014) 『多様性を拓く教師教育』明石書店

5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計6件)

- 田上哲、教育方法学の観点から 1 教育への二つの問い、Plus+(プラス)、フクト、査読無、No. 1、2016、pp.2-5
- 田上哲、教育方法学の観点から 2 子どもの思考・表現と人間形成、Plus+(プラス)、フクト、査読無、No. 2、2016、pp.2-5
- 田上哲、教育方法学の観点から 3 教師の自己改革と「自己否定」的省察、Plus+(プラス)、フクト、査読無、No. 3、2016、pp.2-5
- 田上哲、学習における個と集団のとらえ方と人間形成の課題、日本教育学会研究紀要『教育学研究』、査読有、84 巻、2017、pp.434-445
- 田上哲、教師の自己改革を促す子どもの事例に関する研究、九州大学大学院研究紀要(教育学部門)、査読無、20 巻、2018、pp.29-30
- 田上哲、教師のコミュニケーション能力を問い直す-主体的に対話的に深く「学ぶ」こと、教育と医学、査読無、781 号、2018、pp.13-19

〔学会発表〕(計5件)

- 田上哲、「事例研究」としての授業分析、九州大学・華東師範大学国際教育研究交流集会、九州大学、2016年6月12日
- 田上哲、Inter-cultural Lesson Study に関する基礎的研究、第5回九州大学・公州大 学校国際学術研究フォーラム、韓国・公州大 学校、2016年9月24日
- 田上哲、教師の自己改革を促す子どもの事例に関する研究、日本教師教育学会第27回大会、奈良教育大学、2017年10月1日
- 田上哲、授業と授業研究の方向性の問題 -事例研究としての授業研究からみるエビデンス-、日本教育方法学会第53回の課題研究「エビデンスに基づく教育と教育実践研究の課題」、千葉大学、2017年10月7日
- 田上哲・池田竜介・茂見剛、教育実践研究における事例に関する研究 例外的事例と省察の「自己否定」的方向性、日本教育方法学会第54回大会、和歌山大学、2018年9月29日

〔図書〕(計2件)

- 日本教育方法学会編、教育方法 45 アクティブ・ラーニングの教育方法学的検討、図書

文化、2016、208、分担執筆「教育方法学的立脚点からみたアクティブ・ラーニング」
鹿毛雅治・藤本和久(編著)、「授業研究」を創る、教育出版、2017、180、分担執筆「子ども
の思考と人間形成に視座をおく徹底した授業分析の視点から学ぶ」

6 . 研究組織

単独